

HUG+展 2017

(ハグ・プラス)

審査員講評

伊藤 照哉（あさご芸術の森美術館 館長）

総評：絵画、書、写真、陶芸、織物、その他（立体・オブジェなど）の6部門に、それぞれ、作者の「こだわり」が感じられる作品が多くあった。「思い」をそのままストレートに表現した点を評価したい。作品が見る側との、コミュニケーションツールとして能動的に働き掛けてくる。

優秀作品 「戦士（書）」

漢字、仮名、前衛とバランスよく出品があった。「戦士」は前衛書的に書いているが、余白、墨のかすれを巧みに生かし、水墨画にも見える宇宙観を構成している。

江本 幸仁（公益財団法人 神戸新聞厚生事業団 理事長）

総評：活き活きした作品の中に、夢や笑顔を感じる作品群に喜びを感じた。

優秀作品 「バスに乗ってカバを見に行くよ（絵画）」

ダイナミックなカバと、それに引き込まれるバスの中の子どもたちのワクワクとした思いが見えてきた。

岡 泰正（神戸市立小磯記念美術館・神戸ゆかりの美術館 館長）

総評：ほのぼののどかな作品・鬼気せまる作品、見ごたえのある作品、選者を迷わせる美術展である。選ぶ方がためされているような気分となった。せいっぱい応募者の気持ちにこたえたつもりだが、優劣ではなく、ひとつの発表の場とさせていただけたらよい。

優秀作品 「merry cheerful（絵画）」

力強く手を挙げた顔は、見る者を圧倒する。絵の具を盛り上げてあふれ出る思いをぶつけているが、優美さをうしなっていない。白の縁まわりに色彩を与え、表現された顔を際立たせている。叫びを呑みこんだ一瞬が不思議な力を内部に充満させる。元気を出そうと呼びかけている。

服部 正（甲南大学文学部人間科学科 准教授）

総評：個性豊かな作品が多く、作品との出会いには驚きと喜びがあふれていた。そのぶん審査は大変な厳選となり、入選作品を決めるのは苦渋の決断となった。描きたい、作りたいという気持ちが強く表れている作品や、作者の息遣いや勢いを感じる。

優秀作品 「草木の丘（その他）」

気が遠くなるような丁寧で緻密な作品に思わず息を飲んだ。注ぎ込まれた情熱、費やされた時間の蓄積が、そのまま作品の迫力となり、観る者に語りかけてくるような力強い作品だ。